

—ジギタリス—



東京理科大学薬草園

学名：*Digitalis purpurea* L.

科名：ゴマノハグサ科

属名：ジギタリス属

形態：二年草～多年草。葉は卵状披針形で先の丸い鋸歯があり、全面に短毛がある。大型で互生。夏、穂状花序に鐘状の花を多数付ける。花冠は紅紫色。

成分：強心配糖体 (digitoxin, gitoxin, gitaloxin)、サポニン (digitonin, F-gitonin, desgalactotigonin)、プレグナン配糖体 (purpnin, purpronin) など

使用部位：葉

用途：強心利尿薬として高血圧性などのうっ血性心不全に用いる。

製剤：ジギトキシン、ジギトキシン錠

ヨーロッパ西北部山地に野生する。世界各地で栽培。ジギタリスの葉は中世の初めごろからサイアンと称して民間で使用されており、イギリスでは 1650 年版の薬局方に収載され、日本でも薬局方の初版(1879年)から 14 版まで収載されていた。15 版からは強心配糖体ジギトキシンのみが収載されている。1775 年イギリスの医師ウィリアム・ウィザリングが臨床試験によって顕著な強心作用を認め、それ以降、世界各国で強心利尿薬として医療に供された。ジギタリス成分については 20 世紀初頭から研究が進められ、1929 年に初めて、ジギトキシンが純粹に分離され、その後多数の成分が単離、構造決定されている。ジギタリスの digital は指の意味で、花の形が指サックに似ていることによる。一般に数字で表示するのを digital と呼んでいるのは数を数えるのに指を使う人間の習慣に基づいており、ジギタリスと語源が共通である。

[参考文献]

生薬学 第 8 版 北側勲 他 廣川書店

最新薬用植物学 有澤宗久 他 廣川書店